

## 瀟湘八景の四季化についての新知見 ―足利将軍邸での使用を手がかりに―

武瀟瀟(京都工芸繊維大学)

瀟湘八景は日宋の交流を通して、鎌倉時代に中国から伝来した画題であり、中国では主に巻物の形式であるのに対して、日本では、障屏画のような大画面に描くことが多かった。文献と遺品から、日本において14世紀以降、瀟湘八景を主題として夥しい数の障屏画が制作され、大流行していた様子が窺える。

本発表は、日中の文献を検討することにより、「瀟湘八景」が室町時代に画題として伝来し、それが、大和絵の影響を受けて四季的要素が加味されるに至ったとする定型的な考えに再考を促す試みである。

まず、平安時代の文献を手かかりとして、従来注目されたことがなかったが、絵画としての「瀟湘八景」が伝来する以前の日本で、すでに瀟湘地域に対する認識が存在したことを指摘する。具体的には、瀟湘地域における悲劇的な神話伝説や屈原をはじめとする「政治的失意」、「追放」、「帰隠」といった文学的伝統を、日本と中国が共有していたことに注目する。そのうえで、瀟湘地域は平安時代にすでに詩と画の題材になっていたことを指摘する。

つぎに、中国では、禅僧は支配者とは密接な関係を持たず、むしろ政治に失意する文人と親交する存在である点で、瀟湘地域のイメージは禅僧に共有されたが、一方で、日本においては、「瀟湘八景」は幕府と密接な関係を持つ禅僧を通して伝播することから、「瀟湘八景」の注文主は支配者階層となった点を指摘する。そのうえで、康永3年(1344)、足利尊氏の新築された邸宅に新調された山水屏風(瀟湘八景)や長禄2年(1458)足利義政の高倉御所の瀟湘八景障子などの障屏画に対する題画詩から、受容の初期的な段階において、瀟湘八景障屏画がすでに四季化されていたことを確認する。そして、以下の2点を検証することにより、瀟湘八景障屏画が足利将軍の理想郷的な治世を象徴しているという仮説を提出したい。

根拠の第一は、中国と日本における四季山水図の機能の検証から明らかになるように、四季山水図は、支配者にとって、国が理想郷のような治世になるようにという願望を込めて、晴れ場で使われていた点である。

第二点は、南宋時代以降、「瀟湘八景」を模倣して中国全国に成立をした見立「瀟湘八景」ともいえる存在である。特に南宋時代に成立した西湖十景、金時代の燕京八景、明時代の北京八景のような首都の名勝を八つないしは十つを選定した主題には、四季折々の要素が混入され、しかも、題画詩から、これらは治政を唱える意味合いをもっていたことがわかる。

以上の点から、日本の「瀟湘八景」の四季化は、大和絵との関係で生まれたと考えるよりは、それが積極的に使用された室町将軍邸において、将軍の理想的な治世を言祝ぐ意味合いをもっていたこと、それゆえにこそ、四季が取り込まれたということを結論として提示したい。